

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	韋応物「秋夜寄丘二十二員外」詩再考：詩語としての「散歩」の検討から
Author(s)	山田, 和大
Citation	中國中世文學研究, 76 : 14 - 30
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054525
Right	
Relation	



韋応物 「秋夜寄丘二十二員外」詩再考
―詩語としての「散步」の検討から―

山田和大

はじめに

もつとも人口に膾炙している韋応物詩は、「秋夜寄丘二十二員外」（卷三）である。この詩の中に、「懷君屬秋夜、散步詠涼天」という句がある。これについて、いくつかの訳本に見える訳を任意に挙げてみると、次のような訳が見える。

・折しもこの秋の夜、君のことがしきりに懐かしくなり、ぶらぶらと歩きながら、涼しい夜空の下、詩を詠じている。（『漢詩の事典』大修館書店 一九八七年 田中和夫訳）

・君のことを思っている今は、ちょうど秋の（静かな）夜。／ぶらぶらと歩きながら、涼しい夜空のもと、詩を吟じている。（田口暢穂編集・執筆『漢詩漢文解 积講座第4巻漢詩IV（中・晩唐以降）』昌平社 一九九五）

・たまたま秋夜にあたって、君のことがひとしお思い出される／（こんな夜は、よもすがらともに語りあいたいものだが、それもならず）庭先をそぞろ歩きしながら、詩を口ずさんだ（山田勝美『中国名詩鑑賞辞典』角川書店 一九八三年六版。初版一九七八年）

・私が君のことを思っているのは、この静かな秋の夜／散策しながら、涼しく澄みわたった空に向かい、私は詩を吟じている（前野直彬『唐詩鑑賞辞典』東京堂出版、一九八三年一二版。初版一九七〇年）

・あなたのことを懐うのはちょうど秋の夜／散歩しながらひんやりした空にむかって詩をくちざさむ（吉川幸次郎・小川環樹編『唐詩選』筑摩書房 一九七三年 寛文生訳）

・あなたのことをなつかしんでいるのは、ちょうどいま、この静かな秋の夜。散歩しながら、私は涼しい空の下で、詩を詠じている。（高木正一『唐詩選下』

「散歩」の語に着目してみると、いずれも「散歩」「ぞろ歩き」といったような訳であり、現代日本語の「散歩」とほぼ同様の意味で解釈していると考えられる。ただ、この中にも、庭先での「散歩」もあれば、「散策」のように遠くまで歩いていることを匂わせるものもあるという違いが見いだせる。

この「散歩」という語に関わって、一海知義氏は以下のように述べている。

「散歩」ということばは、六朝から唐にかけての詩に、すでに見える。梁の劉孝威（四九六―五四九）の詩句に「散歩して魚樵を懐う」（『奉和六月壬午忠令』）というのは、その早い例の一つだろう。この「散歩」は、今のわれわれがする散歩とは、なおいささかのずれがあるかも知れない。しかし時代はくだって、唐の白楽天（七七二―八四六）の「犬鷲」と題する詩に、

晚来天气好

散歩中門前

という「散歩」は、現在のわれわれの「散歩」と、かわるまい。「散歩」という語の使用例は、次の宋代の詩になると急にふえる。それは、詩の日常化という点とも、関係するにちがいない。^{〔一〕}

玄圃棲金碧
靈澗抱瓊瑤
築山圖碣岫
穿池控海潮
雷奔石鯨動
水闊牽牛遙
乘龜猶怯渡
鞭石詎成橋
岸崩下生窟
壁峭上千霄
噪蛙常獨沸
遊魚或自跳
荒徑橫臨浦
空舟斜插橈
愁鷓集古樹
白鷺隱青苗
神心重丘壑
散步懷漁樵
石累元卿徑
枝挂許由瓢
伊臣本寂寞
由來畏市朝
爲貪止山水
所競惟逍遙
寄言周伯況

玄圃に金碧を棲まはすがごとく
靈澗に瓊瑤を抱むがごとし
山を築きて碣岫を図き
池を穿ちて海潮を控く
雷奔りて石鯨動き
水闊くして牽牛遙かなり
龜に乗りて猶ほ渡るに怯み
石を鞭うちて詎ぞ橋を成さん
岸は崩れて下に窟を生じ
壁は峭しくして上に霄を干す
噪蛙は常に独り沸き
遊魚は或いは自ら跳ぶ
荒徑 横に浦に臨み
空舟 斜めに橈を挿す
愁鷓は古樹に集まり
白鷺は青苗に隠る
神心 丘壑を重んじ
散歩して漁樵を懐ふ
石は累なる 元卿の徑
枝は挂く 許由の瓢
伊の臣は本 寂寞たり
由來 市朝を畏る
貪と為りて山水に止まり
競ふ所は惟だ逍遙
言を周伯況に寄せ

この指摘を踏まえて改めて「散歩」という語の使用状況を調査すると、唐代以前に一首、その後、韋応物のこの詩を待つまで「散歩」という語は詩文の中に現れず、唐詩全体で見ても韋応物と白居易にしか使用例が見られなかった。白居易が韋応物を自身の詩作のモデルの一つと捉えていたことを踏まえてみると、「散歩」という語について丁寧を追っていくことで、白居易詩と韋応物詩のつながりについてさらに考えていく糸口が掴めるのではないかと思われる。

そこで、本稿では「散歩」という語をめぐる、唐代以前、及び唐代の詩文を対象にして考察していく。その後、韋応物の「秋夜寄丘二十二員外」詩について、説の分かれる第3句を中心に解釈を再考してみたい。

なお、本稿では韋応物詩については『四部叢刊』本「韋江州集」を底本とし、詩の繫年については陶敏・王友勝校注『韋応物集校注』（上海古籍出版社 一九九八 二〇一一年増訂）、孫望編著『韋応物詩集繫年校箋』（中華書局 二〇〇二）を参照した。

一 唐代以前の「散歩」と「閑歩」

まず、韋応物の生きた唐の時代より前の状況を見ていく。管見の限り、一海氏も挙げておられた梁・劉孝威「奉和六月壬午忠令」が唯一の例である。

勞君擅殺綯 君を勞るに殺綯を擅にせん

この詩は、劉孝威の生卒年と詩題から皇太子蕭綱のサロンで作られたものと考えられるが、詩の前半で庭園の広大さを述べる。庭園の中には隠者の世界に相応しい事物が随所に配され、心は隠逸の地である丘や溪谷を重視し、「散歩」しては隠者である漁師や樵のことを思う、と詠う。「散歩」について述べたあとも、許由、後漢の桓元卿といった人物を挙げている。また、最終連では、一度病によって職を去ったのちに再度召し上げられたとき、短い一重の衣や木の皮でつくった頭巾をつけて出仕した周黨（伯況）の故事を踏まえ、劉孝威自身も蕭綱に対するのに、自らの志を曲げずに隠者然としていたいと述べる。こうした詩の内容を踏まえると、ここでの「散歩」は単にぶらぶらと歩くという行為を意味するのではなく、隠遁生活を「懐ふ」よすがであり、契機であったと考えられる。

一方、唐以前には「閑歩」という語が見られる。例えば、曹植「七啓」（『文選』卷三十四）に次のような表現がある。

黼黻之服、紗縠之裳。金華之鳥、動趾遺光。繁飾參差、微鮮若霜。緄佩綢繆、或彫或錯。薰以幽若、流芳肆布。雍容閑歩、周旋馳燿。南威爲之解顏、西施爲之巧笑。此容飾之妙也。子能從我而服之乎。（黼黻の服、紗縠の

裳。金華の鳥、趾を動かし光を遺す。繁飾參差として、微鮮霜のごとし。緄佩網繆して、或いは彫り或いは錯る。薰ずるに幽若を以てし、流芳肆り布く。雍容として閑歩し、周旋して燿を馳す。南威之が為に顔を解し、西施之が為に巧笑す。此れ容飾の妙なり。子能く我に従ひて之を服せんか。」

鏡機子が玄微子に対して世俗のものよさを伝えていく中で、服飾の美しさに言及する場面である。きらびやかな服や金で装飾されたくつ、よい香りのする布のおびものなどを提示し、それを身につけた人物の動作として、「雍容として閑歩」するという表現が見える。ここでの「閑歩」は、ゆったりとして心穏やかな歩みである。

また、『文選』には、李善が「七啓」を引いて注を施した作品に沈約「宿東園」(『文選』巻二十一)がある。

陳王鬪雞道 陳王之鶏を鬪はしむる道
安仁采樵路 安仁の樵を采る路
東郊豈異昔 東郊 豈に昔に異ならんや
聊可閑余歩 聊か余が歩みを閑かにすべし
野徑既盤紆 野徑 既に盤紆たり
荒阡亦交互 荒阡 亦た交互す
槿籬疎復密 槿籬は疎にして復た密
荊扉新且故 荊扉は新たににして且つ故
……

門前何所有 門前 何の有る所ぞ
偶覩犬與鳶 偶たま犬と鳶とを覩る
鳶飽凌風飛 鳶は飽きて風を凌ぎて飛び
犬暖向日眠 犬は暖くして日に向かひて眠る
腹舒穩貼地 腹は舒びて穩やかに地に貼るがごとく
翅凝高摩天 翅は凝りて高く天に摩る
上無羅弋憂 上に羅弋の憂ひ無く
下無羈鎖牽 下に羈鎖の牽無し
見彼物遂性 彼の物の性を遂ぐるを見て
我亦心適然 我も亦た心適然たり
心適復何爲 心適へば復た何をか為す
一詠逍遙篇 一たび逍遙篇を詠ぜん
此仍著於適 此に仍りて適を著す
尚未能忘言 尚ほ未だ言を忘るる能はず

夕暮れの天気がよいときに門の前を散歩し、本性を遂げたイヌやトビを見て、自分の心も愉快になったと言う。夕暮れの天気がよいときに「家の近くをちよつとぶらついた」というくらいの行為として描かれている。

「臥小齋」(『全唐詩』卷四三四)には次のようにある。
朝起視事畢 朝に起きて視事畢はり
晏坐飽食終 晏坐して飽食し終はる
散步長廊下 散歩す 長廊の下
退臥小齋中 退きて小齋の中に臥す

「東園」を曹植や潘岳がかつて詩に描いた「東郊」に擬え「豈異昔」と詠いながら、沈約自身は、「東園」では都のにぎわいとままったく異なる、ゆったりとして穩やかな気持ちで歩くことができるのだ、と詠う。

「野徑」「荒阡」「槿籬」「荊扉」などの点景は、隱者の世界に似ている。しかし、沈約の場合は「東園」という空間こそがゆったりとした気持ちでの「閑歩」を可能にするのだと「東園」のすばらしさを詠うのに対し、劉孝威の「散步」は隱者を懐うよすがであり契機であった。例が少なく、確定は難しいものの、とりあえずは、隱遁志向を示す「散步」とゆったりとした動作や心情を表す「閑歩」といった違いを見出すことができよう。

二 唐詩における「散步」と「閑歩」

唐詩における「散步」は、冒頭に挙げた韋応物の詩のほかには白居易詩に四例見られるのみである。白居易が韋応物を自身の先蹤として捉えていたことを考えると、興味深い現象である。まず、白居易の「散步」について見てゆく。
一海氏も挙げておられた「犬鳶」(『全唐詩』卷四五三)には次のようにある。

晚來天氣好 晚來 天氣好し
散步中門前 散步す 中門の前

拙政自多暇 拙政 自から暇多く
幽情誰與同 幽情 誰か与に同じくせん
孰云二千石 孰か云ふ 二千石と
心如田野翁 心は田野の翁のごとし

朝の政務が終わったあと、おなかいっぱいになるまで食事をとったあと、小さな書齋でごろ寝をするために回廊をあるくことを「散步」と表現している。政治の仕事もなく、のんびりした状況での歩みである。「犬鳶」詩とは、政務が終わったあとという状況が足されている点で異なる。

続いて、「宿東亭曉興」(『全唐詩』卷四四四)には、次のようにある。

溫溫土爐火 溫温たり土爐の火
耿耿紗籠燭 耿耿たり紗籠の燭
獨抱一張琴 独り一張の琴を抱き
夜入東齋宿 夜に東齋の宿に入る
窗聲度殘漏 窓声 殘漏度り
簾影浮初旭 簾影 初旭浮く
頭癢曉梳多 頭癢く曉に梳ること多く
眼昏春睡足 眼昏く春に睡り足る
負暄簷宇下 暄かきを負ふ 簷宇の下
散步池塘曲 散歩す 池塘の曲
南雁去未迴 南雁 去りて未だ迴らず

東風來何速 東風 来たること何ぞ速き
雪依瓦溝白 雪は瓦溝に依りて白く
草邊牆根綠 草は牆根を遶りて緑なり
何言萬戶州 何ぞ言はん 万戸の州の
太守常幽獨 太守常に幽独ならんとは

官舎の東にあるあずまやに宿泊した翌日の行動を詠む中に、池の周りを「散歩」するという表現がある。最終に蘇州刺史である白居易が「幽獨」の境地を得ているとあることから、「散歩」という行為を、政務の忙しさと無縁のときの行動として捉えていることが窺える。最後に「偶作二首」其二（『全唐詩』卷四四五）には次のようにある。

日出起盥櫛 日出でて起きて盥櫛し
振衣入道場 衣を振るひて道場に入る
寂然無他念 寂然として他念無く
但對一爐香 但だ対す 一爐の香
日高始就食 日高くして始めて食に就き
食亦非膏粱 食も亦た膏粱に非ず
精羸隨所有 精粗 有る所に随ひ
亦足飽充腸³ 亦た腸を飽き充たしむるに足る
日午脫巾簪 日午にして巾簪を脱ぎ
燕息窗下床 燕息す 窓下の床
清風颯然至 清風 颯然として至り

四例しかないが、白居易詩における「散歩」は次のような特徴を持つと考えるとよいだろう。

- ① 朝の支度が終わった後、または夕暮れ時、あるいは政務が終わってから、また官舎の中にあっても政務から一時的に解放されてからまたに歩く。公務などから日常的な営為から離れた場を目的を持たずに歩く。
- ② 住居に比較的近いところを歩く。
- ③ 一人で歩く。

白居易の「散歩」には、劉孝威のものと異なり、隱遁生活を希求するよすがとするようなニュアンスはない。彼の「散歩」がどのような意味を持つ行為として描かれているのかも少し詳しく見ていくために、「閑歩」という語と比較していく。唐詩においては、「閑歩」は三八首に見える。これを誰が歩くのか、どこを歩くのかによつて分類すると、以下のようになる。なお、作者名に□をつけているのは、韋応物より以前、または同時代に生きた人物であり、韋応物がその詩を目にする可能性があった詩人である。

【作者自身の行動】 ○一人で歩く

「人里に近い場での行動」
閑歩南園煙雨晴、遙聞絲竹出牆聲。欲拋丹筆三川去、先

臥可致羲皇 臥して羲皇に致すべし
日西引杖屨 日西にして杖屨を引き
散步遊林塘 散歩して林塘に遊ぶ
或飲茶一醜 或いは飲むこと 茶一醜
或吟詩一章 或いは吟ずること 詩一章
日入多不食 日入りて多くは食はず
有時唯命觴 時有りて唯だ觴を命ずるのみ
何以送閒夜 何を以てか閑夜を送らん
一曲秋霓裳 一曲秋霓裳あり
一日分五時 一日 五時に分かれ
作息率有常 作息 率ね常有り
自喜老後健 自ら喜ぶ 老後の健
不嫌閒中忙 閑中の忙を嫌はず
是非一以貫 是非一以て貫く
身世交相忘 身世交ごも相忘る
若問此何許 若し此は何許ぞと問はば
此是無何鄉 此は是れ無何の郷

一日を日の出ごろ、日の高くなりはじめたとき、日が南中する頃、日が西に傾き始めた頃、日の入り後の五つにわけたうち、四つ目の日が西に傾き始めたころの動作として「散歩」は詠まれる。頭巾やかんざしをとって昼寝をしたあとに、茶を飲んだり、詩を吟じたりする楽しみに向かって歩いて行く。これも政務が終わった後の楽しみとして「散歩」を描いているように思われる。

教清商一部成。……

（劉禹錫「和樂天南園試小樂」『全唐詩』卷三六〇）
閒共野人臨野水、新秋高樹挂清暉。不知塵裏無窮事、白鳥雙飛入翠微。（劉得仁「村中間歩」『全唐詩』五四五）
幾處白煙斷、一川紅樹時。壞橋侵轍水、殘照背村碑。（司空圖「閒歩」『全唐詩』卷六三二）
冥得機心豈在僧、柏東閒歩愛騰騰。免教世路人相忌、逢著村醪亦不憎。（司空圖「柏東」『全唐詩』卷六三四）
閒歩偏宜舞袖迎、春光何事獨無情。垂楊合是詩家物、只愛敷溪道北生。

（司空圖「力疾山下吳村看杏花十九首」其十四、
『全唐詩』卷六三四）
「自宅付近あるいは自宅の庭での行動」
靜巷無來客、深居不出門。鋪沙蓋苔面、掃雪擁松根。
漸暖宜閒歩、初晴愛小園。覓花都未有、唯覺樹枝繁。
（白居易「新居早春二首」其一、『全唐詩』卷四四二）
名利既兩忘、形體方自遂。臥掩羅雀門、無人驚我睡。
睡足斗撒衣、閒歩中庭地。食飽摩塗腹、心頭無一事。
除卻玄晏翁、何人知此味。

（白居易「寄皇甫賓客」『全唐詩』卷四四四）
繞池閒歩看魚游、正值兒童弄釣舟。一種愛魚心各異、我來施食爾垂鉤。（白居易「觀游魚」『全唐詩』卷四五一）
「人里から距離のある山水での行動」
休沐乘閒豫、清晨步北林。池塘藉芳草、蘭芷襲幽衿。
霧中分曉日、花裏弄春禽。野逕香恆滿、山階筍屐侵。

何須命輕蓋、桃李自成陰。

〔楊師道〕「春朝閒步」、『全唐詩』卷三四）
黃花丹葉滿江城、暫愛江頭風景清。閒步欲舒山野性、貌
貅不許獨行人。

〔武元衡〕「秋日出遊偶作」、『全唐詩』卷三二七）
爲愛逍遙第一篇、時時閒步賞風煙。看花臨水心無事、功
業成來二十年。

〔劉禹錫〕「和裴相公傍水閒行」、『全唐詩』卷三六五）
沙彌舞袈裟、走向躑躅飛。閒步亦惺惺、芳援相依依。
噫塞春咽喉、蜂蝶事光輝。群嬉且已晚、孤引將何歸。
流豔去不息、朝英亦疏微。

〔孟郊〕「嵩少」、『全唐詩』卷二七六）
扶杖起病初、策馬力未任。既懶出門去、亦無客來尋。
以此遂成閒、閒步繞園林。天曉煙景澹、樹寒鳥雀深。
一酌池上酒、數聲竹間吟。寄言東曹長、當知幽獨心。

〔白居易〕「林下閒步寄皇甫庶子」、『全唐詩』卷四三二）
江景又妍和、牽愁發浩歌。晴沙金屑色、春水麴塵波。
紅簇交枝杏、青含卷葉荷。藉莎憐軟暖、憩樹愛婆娑。
書信朝賢斷、知音野老多。相逢不閒語、爭奈日長何。

〔白居易〕「春江閒步贈張山人」、『全唐詩』卷四四〇）
秋景引閒步、山遊不知疲。杖藜捨輿馬、十里與僧期。
昔嘗憂六十、四體不支持。今來已及此、猶未苦衰羸。
心興遇境發、身力因行知。尋雲到起處、愛泉聽滴時。
南村韋處士、西寺閑禪師。山頭與澗底、閒健且相隨。

〔白居易〕「秋遊平泉贈韋處士閑禪師」、『全唐詩』卷四四五）

莊南縱步遊荒野、獨鳥寒煙輕惹惹。傍山疏雨溼秋花、僻
路淺泉浮敗果。樵人相見指驚鷹、牧童四散收嘶馬。一壺
傾盡未能歸、黃昏更望諸峯火。

〔韓偓〕「閒步」、『全唐詩』卷六八二）
〔寺院や道観での行動〕

廣庭獨閒步、夜色方湛然。丹閣已排雲、皓月更高懸。繁
露降秋節、蒼林鬱芊芊。仰觀天氣涼、高詠古人篇。撫己
亮無庸、結交賴群賢。屬予翹思時、方子中夜眠。相去隔
城闕、佳期屢徂遷。如何日夕待、見月三四圓。

〔韋心物〕「善福精舍秋夜遲諸君」卷七）
貧居依柳市、閒步在蓮宮。高閣宜春雨、長廊好嘯風。誠
如雙樹下、豈比一丘中。

〔皇甫冉〕「酬楊侍御寺中見招」、『全唐詩』卷二五〇）
巖白雲尚屯、林紅葉初隕。秋光引閒步、不知身遠近。
夕投靈洞宿、臥覺塵機泯。名利心既忘、市朝夢亦盡。
暫來尚如此、況乃終身隱。何以療夜飢、一匙雲母粉。

〔白居易〕「宿簡寂觀」、『全唐詩』卷四三二〇）
金火不相待、炎涼雨中變。林晴有殘蟬、巢冷無留燕。
沈吟卷長簾、愴惻收團扇。向夕稍無泥、閒步青苔院。
……〔白居易〕「秋霽」、『全唐詩』卷四三三三）
〔仕事の合間の行動〕
由來束帶士、請謁無朝暮。公暇及私身、何能獨閒步。
摘葉愛芳在、捫竹憐粉污。岸幘偃東齋、夏天清曉露。
懷仙閱真誥、貽友題幽素。榮達頗知疏、恬然自成度。

雪盡南坡雁北飛、草根春意勝春暉。曲江永日無人到、獨
遶寒池又獨歸。

〔裴夷直〕「窮冬曲江閒步」、『全唐詩』卷五一三）
青春思楚地、閒步出秦城。滿眼是岐路、何年見弟兄。
煙霞裝媚景、霄漢指前程。盡日徘徊處、歸鴻過玉京。

〔朱慶餘〕「長安春日野中」、『全唐詩』卷五一五）
堅輕筇竹杖、一枝有九節。寄與沃洲人、閒步青山月。

〔高駢〕「筇竹杖寄僧」、『全唐詩』卷五九八）
殘星殘月一聲鐘、谷際巖隈爽氣濃。不向壁臺驚醉夢、但
來清鏡促愁容。繁金露潔黃籠菊、獨翠煙凝遠澗松。閒步
幽林與苔徑、漸移栖鳥及鳴蛩。

〔羅鄴〕「秋晚」、『全唐詩』卷六五四）
溪風如扇雨如絲、閒步閒吟柳惺詩。杯酒疏狂非曩日、野
花狼藉似當時。道窮謾有依劉感、才急應無借寇期。滿眼
雲山莫相笑、與君俱是受深知。

〔羅隱〕「晉溪晚泊寄裴庶子」、『全唐詩』卷六六二）
韋杜八九月、亭臺高下風。獨來新霽後、閒步澹煙中。
荷密連池綠、柿繁和葉紅。主人貪貴達、清境屬鄰翁。

〔鄭谷〕「遊貴侯城南林墅」、『全唐詩』卷六七四）
晚涼閒步向江亭、默默看書旋旋行。風轉滯帆狂得勢、潮
來諸水寂無聲。……〔韓偓〕「有囑」、『全唐詩』卷六八〇）
一手攜書一杖筇、出門何處覺情通。立談禪客傳心印、坐
睡漁師著背蓬。青布旗誇千日酒、白頭浪吼半江風。淮陰
市裏人相見、盡道途窮未必窮。

〔韓偓〕「江岸閒步」、『全唐詩』卷六八一）

綠苔日已滿、幽寂誰來顧。

○他者と行う

〔山水での行動〕
方駕與吾友、同懷不異尋。偶逢池竹處、便會江湖心。
夏近林方密、春餘水更深。清華兩輝映、閒步亦窺臨。
……〔張九齡〕「嘗與大理丞袁公太府丞田公偕詣一
所林沼尤勝因並坐其次相得甚歡遂賦詩焉
以詠其事」、『全唐詩』卷四九）

藉草與行莎、相看日未斜。斷崖分鳥道、疏樹見人家。
望遠臨孤石、吟餘落片霞。野情看不足、歸路思猶賒。
〔薛瑩〕「秋晚同友人閒步」、『全唐詩』卷五四二）
何況歸山後、而今已似仙。卜居天苑畔、閒步禁樓前。
落日明沙岸、微風上紙鸞。靜還林石下、坐讀養生篇。

〔劉得仁〕「訪曲江胡處士」、『全唐詩』卷五四四）
疏野林亭震澤西、朗吟閒步喜相攜。時時風折蘆花亂、處
處霜摧稻穗低。……〔張賁〕「奉和襲美題褚家林亭」、『全唐詩』卷六三二）

〔作者以外の行動〕
三十不官亦不娶、時人焉識道高下。房中唯有老氏經、樞
上空餘少遊馬。往來嵩華與函秦、放歌一曲前山春。西林
獨鶴引閒步、南澗飛泉清角巾。……〔李頎〕「送劉十」、『全唐詩』卷一三三）

輕微管蒯將何用、容足偷安事頗同。日入信陵賓館靜、贈
君閒步月明中。〔劉商〕「贈嚴四草屨」、『全唐詩』卷三〇四）

馬踏塵上霜、月明江頭路。行人朝氣銳、宿鳥相辭去。
流水隔遠村、縵山多紅樹。悠悠關塞內、往來無閒歩。

(劉禹錫「途中早發」『全唐詩』卷三五五)

【人間以外】

〔動物の行動〕

山陽郭裏無潮、野水自向新橋。魚網平鋪荷葉、鷺鷥閒歩
稻苗……

(李嘉祐「白田西憶楚州使君弟」『全唐詩』卷二〇七)

〔流れる雲や水の動きの比喩〕

上方下方雪中路、白雲流水如閒歩。數峰行盡猶未歸、寂寞
寔聲竹陰暮。(盧綸「過仙遊寺」『全唐詩』卷二七九)

まず、韋応物詩以前、あるいは韋応物と同時代のもの
を見ていくと、「人里離れた山水での行動」、「寺院や道
観での行動」が中心である。作者以外の行動として詠ま
れている李頎「送劉十」も山水での行動として詠われて
いる。また、動物の行動や流れる雲や水の動きとして詠
むものが見られるが、「閑歩」する動物として描かれてい
るサギは山水の中の田園を歩くと詠まれており、「白雲流
水」を見る盧綸「過仙遊寺」は寺院での詠である。いず
れも、人里離れた場、寺院での行動という点で他の詩と
の共通点があり、人間の「人里離れた山水での行動」「寺
院や道観での行動」を表す側面から派生した用法である
と推測できる。韋応物詩における用法も大まかにはこの

分類に入ってくるが、韋応物詩についてはのちに再度取
り上げて検討する。

韋応物以後も含めて唐詩全体を見ていくと、詩の数が
多いので当然ではあるが、さきほど確認した「散歩」と
比べると、状況のバリエーションが多いことがわかる。

「散歩」に見られなかったものとしては、

- ・人里離れた山水や寺院・道観で行う
- ・他者の行動(通行人など無名のものも含む)
- ・他者と複数で行う行動
- ・動物や白雲流水の動き

といったものである。

比較のために白居易詩のみを抽出すると、「新居早春二
首」其一、「寄皇甫賓客」、「觀游魚」が自宅付近または
自宅の庭での歩み、「林下閒歩寄皇甫庶子」、「春江閒歩
贈張山人」、「秋遊平泉贈韋處士閑禪師」が人里から比較
的離れた山水の場での歩み、「宿簡寂觀」、「秋霽」が寺
院・道観での歩みとして詠まれており、「散歩」の詩が詠
まれなかった場でも「閑歩」は使われている。山水や寺
院・道観での歩みは日常的な営為から離れた場でなされ
るという意味では、「散歩」に近いと言えるかもしれない。

ここで、もう少し詩語としての違いを考えていくため
に、「散歩」とほぼ同様の場、すなわち自宅付近で詠まれ
ている三首を取り上げて検討を進めていく。先に示した

ように唐詩において、「閑歩」を自宅付近、あるいは自宅
の庭で行う行動として詠むのは、白居易のみである。

靜巷無來客	靜巷に來客無く
深居不出門	深居して門を出でず
鋪沙蓋苔面	沙を鋪きて苔面を蓋ひ
掃雪擁松根	雪を掃ひて松根を擁す
漸暖宜閒歩	漸く暖かくして閑歩するに宜しく
初晴愛小園	初めて晴れて小園を愛す
覓花都未有	花を覓むるも都て未だ有らず
唯覺樹枝繁	唯だ樹枝の繁るを覺ゆ

(白居易「新居早春二首」其一、『全唐詩』卷四四二)

暖かくなり始めた早春のころの様子を詠う。來客もな
く一人で庭仕事をしながら、そぞろ歩きをするのによい
時期だと考えている様子が窺える。ここの「閑歩」につ
いては、この詩の「其二」に「地潤東風暖、閒行蹋草芽。」
(地潤ひて東風暖かく、閑行して草芽を蹋む。)とある、
若芽を踏みながらぶらぶらと庭を歩く行動と同様なこと
を指すと思われる。ただ、本詩では、「閒」字が四字目に
あるため、平仄の関係上、「散歩」が使えなかったという
可能性がある点には留意する必要がある。

名利既兩忘 名利既に兩つながら忘れ
形體方自遂 形体方に自から遂ぐ

臥掩羅雀門	臥して羅雀の門を掩ひ
無人驚我睡	人の我が睡りを驚かす無し
睡足斗撒衣	睡り足りて衣を斗撒し
閒歩中庭地	閒歩す中庭の地
食飽摩挲腹	食飽きて腹を摩挲し
心頭無一事	心頭 一事無し
除卻玄晏翁	玄晏翁を除却して
何人知此味	何人か此の味を知らん

(白居易「寄皇甫賓客」『全唐詩』卷四四四)

名譽も利益も忘れ、本性のままに生き、十分な眠りを
とつたあとに中庭を歩くことを「閑歩」と表現する。憂
いもなく、心が満ち足りたときの行動である。

繞池閒歩看魚游 池を繞りて閑歩し魚の遊ぶを見る
正值兒童弄釣舟 正に兒童の釣舟を弄するに値ふ
一種愛魚心各異 一種魚を愛するも心は各おの異なり
我來施食爾垂鉤 我は來たりて食を施し爾は鉤を垂る

(白居易「觀游魚」『全唐詩』卷四五一)

自宅の池の周りを歩くことを「閑歩」と言う。ともに
魚を愛するが、子供は釣るために、詩人は魚に餌をやる
ために来ているという違いがあるという日常の一コマを
描く中の動作である。

「散歩」と「閑歩」とを比較すると、いずれにも、

①朝の支度が終わった後、または夕暮れ時、あるいは
政務が終わってから、また官舎の中にあっても政務
から一時的に解放されてからまたに歩く。公務など
日常的な営為から離れた場を目的を持たずに歩く。
②住居に比較的近いところを歩く。

という二つの特徴を認めることができる。特に、「寄皇甫
賓客」、「観游魚」では、「散歩」と「閑歩」の境界があ
いまいで、「閑歩」を「散歩」に入れ替えても通じそうで
もある。ただし、唐詩における「散歩」と「閑歩」の差
については、「散歩」が住居から遠く離れることはないの
に對し、「閑歩」は山水、寺院・道観といった住居から遠
くところを歩く場合もあること、また、「散歩」は必ず「③
一人で歩く」が、「閑歩」は一人で歩く場合もあるし、他
者と複数で歩く場合もあること、という違いは指摘する
ことができる。

三 韋応物詩における「散歩」「閑歩」

まず、韋応物詩における「閑歩」の例について見てい
く。韋応物詩において、「閑歩」は二例見られる。

廣庭獨閑歩
夜色方湛然
丹閣已排雲

廣庭に独り閑歩し
夜色方に湛然たり
丹閣已に雲を排し

請謁無朝暮
公暇及私身
何能獨閑歩
摘葉愛芳在
捫竹憐粉汚
岸幘偃東齋
夏天清曉露
懷仙閨眞誥
貽友題幽素
榮達頗知疎
恬然自成度
綠苔日已滿
幽寂誰來顧

謁を請ふに朝暮無し
公暇私身に及び
何ぞ能く独り閑歩せん
葉を摘みて芳の在るを愛し
竹を捫きて粉の汚すを憐む
岸幘もて東齋に偃み
夏天 曉露清し
仙を懐ひて眞誥を閲し
友に貽るに幽素と題す
榮達 頗る疎なるを知り
恬然として自ら度を成す
綠苔 日に已に満ち
幽寂 誰か来たりて顧みん

(449 「休暇東齋」卷八)

大暦十一年から一三年頃、京兆府功曹のときの作。
公務から離れた休日に、どうしてただ暇に任せて歩く
だろうか、という。気分としては、せつかくの休みに何
もせずにただ歩くだけなのもつたいなく、自分なりの
ルールの中で過ごし、香りのよい葉や白い粉が表面につ
いた竹を愛でたり、頭巾をだらしなくずらしてかぶつて
のんびりと『眞誥』を読んだり、あるいは同じ思いを抱
く友に手紙を贈ったりするなど、隠者が行うような行動
を積極的に行動とする意識がある。第5句以降の様々
な行動をしていることと対比されているところから考え

皓月更高懸 皓月更に高く懸かる
繁露降秋節 繁露 秋節に降り
蒼林鬱芊芊 蒼林 鬱として芊芊たり
仰觀天氣涼 觀を仰げば天氣涼しく
高詠古人篇 高く古人の篇を詠ず
撫己亮無庸 己を撫すに亮に庸無く
結交頼群賢 結交 群賢を頼む
屬予翹思時 屬に予 翹思の時に
方子中夜眠 方に子 中夜に眠る
相去隔城闕 相ひ去りて城闕を隔つるも
佳期屢徂遷 佳期に屢しば徂遷す
如何日夕待 如何ぞ日夕に待ち
見月三四圓 月の三四たび円なるを見ん

(410 「善福精舍秋夜遲諸君」卷七)

大暦十四年または建中元年秋、灑上閑居期の作。
韋応物がともに寺院で過ごしたいと望む「諸君」に對
して詠んだ詩である。詩題に明らかかなように「諸君」を
待つ間の寺院でのそぞろ歩きを「閑歩」と言っている。
ここには、白詩に見えた春の暖かさや眠りが足りて気持
ちが満たされている状態で歩くというものは異なり、
いわゆる暇つぶしのような、やや満たされない心持ちで
行うというニュアンスがある。

由來東帶士 由來 東帶の士

ると、「閑歩」そのものは、暇に任せたそぞろ歩きといっ
た色を持っている。
韋応物詩において、「閑歩」は、詠まれる場にかかわら
ず、暇つぶしのそぞろ歩きということができそうである。
白居易は、どちらかという「閑歩」に積極的な意味合
いをもたせていたが、韋応物は「閑歩」にはあまりよい
意味合いを含ませていないようである。
以上を踏まえて、再度、160「秋夜寄丘二十二員外」(卷
三)について検討する。

懷君屬秋夜 君を懷ふは秋夜に属す
散步詠涼天 散步して涼天に詠ず
山空松子落 山空くして松子落つ
幽人應未眠 幽人応に未だ眠らざるべし

友人丘丹を思いながら、「散歩」して秋の涼しい夜空に
向かって詩をうそぶく。山には人氣はなく、松かさが静
寂の中に落ちる音が聞こえるとき、隠者であるあなたは
きつとまだ眠っていないことだろう、という。
この詩の第3句を巡っては、田中和夫氏が整理してい
るように、「相手の住んでいる景色を想像したものとする」
という説と、「作者の散歩しているあたりの景色を述べた
ものとする」説の二つがある¹⁾。

第3句を丘丹の状況を詠むとするもののうち、比較的
早い時期の指摘として、明・唐汝詢は次のように述べる。

涼天散步、絃己之離懷、松子夜零、想彼之幽興。(涼天に散歩するは、己の離懷を叙し、松子の夜に零つるは、彼の幽興を想ふ。)¹⁵

前半は詩人の思い、後半は友人の状況を詠むという。また、清・徐増は次のように言う。

懷君適在秋夜。天涼可愛、惟散步庭際、以咏懷君之詩。于是趁筆寫到員外身上去、曰、「君今在空山、人境兩寂之際、松子間落、林中幽聲。幽人亦應散步未眠也。」(君を懷ふは適に秋夜に在り。天涼しくして愛すべく、惟だ庭際を散歩して、以て君を懷ふの詩を咏むのみ。是に于いて筆を趁らせて員外の身上を写し到り去りて、曰く、「君今空山に在り、人境も両ながら寂なるの際、松子間まかに落ち、林中に幽声あり。幽人も亦た応に散歩して未だ眠らざるべし」と。)¹⁶

これは、詩人が庭を散歩して相手を思う詩を詠んでいるとする。友人丘丹のいる空山も韋応物がいる人境も両方静かであるときに、君のいる空山では松かさが静かに落ちて林の中に奥深いかすかな音が聞こえることだろう、その音を聞きながら君も散歩して眠らずにいるだろう、と詩を解釈している。詩人のいる庭と友人のいる空山の林がオーバーラップするように描かれているが、第3句

だと解するものとして、次のようなものがある。

第3句「山空しうして松子落つ」を、あい手の住んでいる山の景色を想像して「山には人げもなく松かさの落ちる音が聞こえるだけだろう」といつてやつたという解釋もある。それでも通ずる。しかし感じの統一という見地から、前のように(引用者注・第3句を韋応物自身の状況として)解した。作者自身の周囲の印象のなかに沈みながら、思うあい手の姿がそこに浮き出してくる。¹⁷

韋応物は陶淵明を学ぶといわれ、王維と並び称される。この詩など、まことに幽絶と称すべく、万籟寂として静まった中に、かすかに松子の地に落ちる音を聞き、山中の幽寂は更に深まる。韋応物の詩に禅の趣きありという所以である。¹⁸

詩の味わいとして禅味を読み取っていく、これらの解釈は、詩の深みを味わえるという点で魅力的である。

以上から、第3句を韋応物のいる場として捉えるものは、「幽絶」な雰囲気や禅味を求めて解釈をする傾向にあることがわかる。

作品としての本詩に後世の人が向き合えば、韋応物が山に行つたと読むのも、丘丹のいる場の風景として読むのも、いずれも成り立つと思われるが、韋応物本人がど

の「空山」を友人がいる場として解釈している。

現代人の解釈としては、次のようなものもある。

詩人在涼秋之夜散步时，徘徊沉吟，想起了正在临平山学道的故人丘丹，揣测他山居空寂、相思未眠的情况。诗人将实笔与虚写结合，把同一时间段内发生在不同空间场景的事连缀起来，从而给读者完整清晰的印象。¹⁹

前半二句が実景、後半二句が想像により書いたものであり、同じ時間にある別々の空間の情景がつながり、読者に清らかな印象を与えているという。作者が「散歩」する場については具体が示されていないが、第3句の「山」は丘丹の住む山と解していることがわかる。

以上から、第3句を友人丘丹のいる場として捉えるものには、詩人が庭などを散歩をしているときに相手の場を想像して詠むと解釈する傾向にあることがわかる。

一方、第3句を韋応物のいる場とするものとして、服部南郭は第3句について次のように言う。

散歩して、夜の景色を見れば、山も空しうして、松子などが落ちて、静かなことぢや²⁰。

これは明らかに、第3句の「山」を韋応物が散歩している場所として捉えている。

また、服部南郭と同様に、第3句が韋応物自身の状況

ちらの意味合いで詩を詠もうとしたのか、というところはやはり気になる。

さきほどまで確認してきた「散歩」と「閑歩」の使い分けから考えると、韋応物自身が山に入って歩くとするのは、そぐわない。唯一の先例である劉孝威の詩も、皇太子とともに過ごしている庭でのことを述べていたし、韋応物以後の白居易の詩においても、庭や家の近所を歩く様子を「散歩」と表現しており、韋応物詩においても庭や家の近所で歩くさまを表していると考えるほうが自然なためである。

補足的に地理について確認しておく、当時、韋応物がいた蘇州の官舎は、蘇州の呉県にあったと考えられる。呉県にある山として、『元和郡県図志』卷二十五「蘇州・呉県」には、「虎邱山在縣西北八里。」(虎邱山は県の西北八里に在り。)と見える。ほかに山が存在する可能性が皆無だとは言えないが、『元和郡県図志』の記述に拠る限りでは、呉県には虎邱山しか山がない。夜に刺史が一人で近所歩きである「散歩」をするために行く場としては、八里(約四km)はやや遠いようにも思われる。一方の丘丹は、当時、杭州の臨平山に隠棲していたため、夜に山中にいても不思議はない。地理的な面から考えても、第3句はもともと丘丹のことを詠んでいたとするほうが無理がない。

以上から、韋応物詩における「散歩」も、もともとは蘇州の官舎の近くを歩いたという意味で使われていたと

するのが妥当であろう。そのため、韋応物自身は、160「秋寄丘二十二員外」詩の前半二句を自らの状況として詠み、その対比として後半二句を丘丹の状況として詠もうとしたとするほうがよいと考えられる。

おわりに

本稿では、韋応物「秋夜寄丘二十二員外」詩の解釈を再考するために、唐代までの「散步」と「閑歩」という語について確認し、当該の詩の、特に第3句をどのよう

に解釈すべきかを考えてきた。
「散歩」は家の庭や近所を歩くときに用いられる傾向にあり、「閑歩」はそれ以外の遠い地を歩くときにも用いられる傾向が見られた。従来、第3句については、韋応物自身の行為を述べたものか丘丹の状況を述べたものかという二説あったが、この「散歩」のニュアンスを踏まえると、第3句は丘丹の状況を述べたものとするほうがよいという結論が得られた。

現存する資料に徴する限り、「散歩」という語は、唐詩では韋応物が初めて使用した。本稿では、韋応物がなぜこうした「散歩」という語の導入をすることができたのか、という点までは踏み込めていない。これについては、韋応物自身がややマイナスなニュアンスを含んで用いていた「閑歩」を、本詩においては使わなかったという点を踏まえてみると、彼自身の吏隠意識を含む、中唐における吏隠の諸相と、詩に使用される語彙との関わりを整

理して考察する必要があると思われる。白居易とのつながりを考える上でも吏隠との関わりについて詳細に考えていく必要があるだろう。この点については、稿を改めて論じてみたい。

注

[1] 一海知義『漢詩一日一首（秋）』（平凡社 二〇〇七）「散歩」項。

[2] 「退臥」二字、底本作「臥退」。今拠『白居易詩集校注』改。

[3] 謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局 二〇〇六）の校註に「金澤本、管見抄本作「飽我腸。」とある。これだと、「我が腸を飽かしむ」と読める。

[4] 松浦友久編著『校注唐詩解題辭典』（大修館書店 一九八七）。

[5] 『唐詩解』卷二十三（国立公文書館デジタルアーカイブ）。

[6] 『而庵說唐詩』卷九（未見）。『中華大典隋唐五代文学分典三』（江蘇古籍出版社 二〇〇〇）引）。

[7] 陶敏、王友勝選注『韦应物诗选』（中華書局 二〇〇五）。

[8] 服部南郭述・日野龍夫校注『唐詩選国字解3』（東洋文庫 一九八二）。

[9] 斎藤响『漢詩大系第七卷 唐詩選下』（集英社 昭和四〇）。なお、斎藤氏は第3・4句を「山はひっそりして人げがなく、松かさの落ちるかすかな音がする。ああ、世をかくれすむ人よ、今宵は君もまだ眠らずにいるでしょう。」と訳されてい

る。

[10] 目加田誠『新釈漢文大系 唐詩選』（明治書院 昭和三九）。

なお、目加田氏は別のところで次のような指摘をされている。

秋夜、友を懐うて作る。韋応物は王維の神韻を伝えた人と言われるが、この詩など、まことに禅味があり、幽玄な趣を得たものと思われる。

（蘅塘退士編・目加田誠訳注『唐詩三百首3』

東洋文庫 一九七五）